

生きることのストレスから パーソナリティの発達をとらえる枠組み

企画者 榎本博明 (名城大学)
 司会者 渥美純子 (名城大学)
 話題提供者 榎本博明 (名城大学)
 亀田 研 (名古屋大学)
 谷 伊織 (浜松医科大学)
 浦田 悠 (名城大学)
 指定討論者 藤永 保 (お茶の水女子大学)
 大野 久 (立教大学)

現代の日本社会は、スピード化、効率化、多様化、技術革新、役割変化、ライフスタイル変化などさまざまな波が押し寄せ、生きることのストレスに満ちた時代といえる。このような時代をアイデンティティの問いと格闘しながら自己確立に向かっている青年の心の発達の様相はいかなるものなのか。そうした問いを掲げ、現代の青年の自己確立に向けての心の発達の複雑な様相をとらえようとの試みに着手した。

今回のシンポジストは、青年期のパーソナリティの発達を生きることのストレスという視点を絡めて検討する縦断的な調査研究に取り組んでいる4名の共同研究者たちである。まずは初回ということで、現在進行中の調査データを提示しつつそれぞれの視点からパーソナリティの発達について論じる。

発達理論に詳しい発達研究者による指定討論および会場の聴衆による意見も交えて、生きることのストレスと絡めつつパーソナリティの発達をどのように捉えたらよいかを考える場としたい。

【アイデンティティの意識からみたパーソナリティの発達】
 名城大学 榎本博明

筆者は、青年期の発達において中核的な位置を占めると考えられる自己のアイデンティティに焦点づけた検討を行っている。本研究で用いられた自己アイデンティティ尺度は、既存のアイデンティティ尺度（自我同一性尺度）や Erikson, E. H. の記述に含まれる要素を漏れなく含むように配慮して筆者が開発したものである。概念的には以下の10の要素から構成され、各要素5項目、計50項目からなる。①一貫性・連続性・独自性 ②勤勉性 ③自己への信頼 ④現在の自己投入 ⑤主体性・自律性 ⑥将来展望 ⑦時間への信頼 ⑧他者への信頼・親密性 ⑨社会的役割の取り入れ ⑩自己受容

項目ごとに性差に関する検討を行った結果（ t 検定）、50項目中11項目で有意な性差が、4項目で有意傾向の性差がみられ、青年期における自己のアイデンティティに関わる項目には性差が比較的強くみられることがわかった。男性の方が有意に肯定しているのは一貫性、主体性、自己への信頼の高さを表す項目であり、女性の方が有意に肯定しているのは他者への信頼、時間への信頼、自己受容の高さを表す項目であった。このような傾向には性役割との関連が色濃く反映されていると考えられ、価値観の多様化や男女の境界の不鮮明化のみみられる今日においても、伝統的性役割観が青年期の自己のアイデンティティの発達に強く影響している可能性が示唆された。

項目ごとに年齢差の検討を行った結果（一元配置分散分析）、50項目中15項目で有意な年齢差、10項目で有意傾向の年齢差がみられ、青年期における自己のアイデンティティの発達には年齢が強く関係していることがわかった。有意差のみみられた項目に関して多重比較を行った結果、年齢とともにアイデンティティの各側面が発達していくことが確認された。ここから、わずか5年ほどの年齢の幅の中にも発達の変化の動きがみられることがわかり、青年期には自己のアイデンティティが急速に発達していくことが示唆された。

今後、自己のアイデンティティの発達像をより精緻にとらえるとともに、どのような要因が影響しているかを検討していきたい。

【人生の意味の探求と保有の関連】

名古屋大学大学院教育発達科学研究科 亀田研
 心理学における人生の意味に関する実証研究では、人生の意味の探求という側面と人生の意味の保有という二側面の研究がみられる (Frazier, Oishi & Steger, 2003)。人生の意味の探求と意味の保有という二つの側

面の関連性を日本版「人生の意味」尺度 (MLQ) (The Meaning in Life Questionnaire) を用いて検討した結果、中程度の相関がみられた (亀田他, 2009)。そのことから、人生の意味を探求することと、保有することとの間に正の関連性があることが示された。これは人生の意味を探求しながら、意味を感じていることを示している。人生の意味に関する興味関心の有無により探求と同時に保有の状態が得られる可能性や自我発達を介して、相関が生じたのではないだろうか。どのような意味での関連性であるのかの詳細は他の尺度との関連性や、調査面接等の質的調査により探求していくべきであろう。今後は、この尺度を用いて、パーソナリティ的視点、発達の視点によって、人生の意味を問うことと人生の意味を感じる (保有すること) との間の関係を探求していくことや、人生の意味を問い、感じることのパーソナリティ発達への影響を検討していくことが可能になるであろう。

【ビッグファイブ (特性) からみたパーソナリティの発達】

浜松医科大学 谷伊織

性格、あるいはパーソナリティへの関心は古くから存在し、日常的なものである。心理学においても、性格についてこれまで様々な研究が行われており、多くの理論が存在する。代表的な理論としては類型論・特性論などがあるが、なかでも特性論から発展した人間の性格特性を5つの因子によって包括的に表現するという性格特性の5因子モデル (Five-Factor model; FFM) は近年急速に勢力を伸ばし、多くの支持を得るものとなった。このモデルはパーソナリティを理解する上で非常に便利かつ明快なものであると言われており、さまざまな領域における研究で用いられている。また、この理論はこれまでの性格理論を統合する枠組みとなりうるとも考えられており、他の理論との関連性についても多くのことが明らかになってきている。そしてこのモデルの妥当性を裏付ける研究も多く存在している。しかし、その一方でこのモデルに関しての欠点が述べられることもしばしば見受けられ (McAdams, 1992)、このモデルはその存在基盤が脆弱であるといわれている。このような批判が出る背景には、「性格特性を表す用語を集めて因子分析をすると、5因子に分類できる」という事実以外にはその存在の証拠が示されていないということがある。また、因子数については見解の一致が見られても、その名称や本質についてはまだ十分な共通の理解が存在していないというのが現状であり、研究者間で同じ因子が別の呼

称で呼ばれることも少なくない。これを理由に各因子の構成概念妥当性に疑問を示すものもある。その対策として、このモデルに即したデータの蓄積がわが国でも必要であると考えられる。わが国は欧米に比較してパーソナリティの研究の蓄積が不十分であり、代表的なモデルである5因子特性についても、十分な発達の検討を示すデータが見受けられない。そこで、ここでは5因子モデルについての横断的なデータによる検討と、欧米における研究成果との比較を行い、5因子モデルよりパーソナリティの発達をとらえる提言を述べる。また、ストレスとの関連についても記述し、5因子性格特性の本質についての検討を試みたい。

【重要な人生の意味についての尺度 (Important Meanings Index: IMI) の構成】

名城大学大学院総合学術研究科 浦田 悠

人生の意味の問題は、価値、ウェルビーイング、QOL、生きがい、英知など、幅広い領域に関連する概念であり、1960年代以降、Franklの実存心理学の流れを汲んで多くの研究がなされてきた。これらの研究では、「意味の構成要素」「意味の源 (sources)」「意味の幅 (breadth)」「意味の深さ (depth)」などの概念枠組みが用いられてきたが、人生の意味という概念自体の意味については十分な整理がなされないままに知見が蓄積されてきた。

この現状を踏まえ、筆者は人生の意味の概念に関する哲学や人間学の理論と、心理学における実証的な研究を整理し、それらに関係づけるようなモデルの構成を試みてきた。そのモデルでは、意味の源についての先行研究を包括的に分類しなおし、「個人的意味」「関係の意味」「社会的/普遍の意味」「宗教的/霊的意味」の4つの基本原理のもとに約30の基本的な意味の源を抽出した。

現在、この分類をもとに、意味の源の個人にとっての重要度を測定する尺度 (Important Meanings Index: IMI) を構成することを目指している。今後は、この尺度の精緻化を進め、現代人の人生観のパターンや、精神的健康との関連、発達プロセスにおける人生観の諸相などを明らかにしていきたいと考えている。今回のシンポジウムでは、尺度構成の背景となった理論的モデルを紹介しつつ、IMIによって測定された重要な人生の意味の源の諸相について発表する予定である。

(本調査研究は、文部科学省私立大学学術高度化推進事業・学術フロンティア推進事業の助成を得て行ったものである)